

令和4年度 学力向上指導改善プラン

三田市立すずかけ台小学校長 佐藤千江子

学校教育目標		夢に向かって共に歩む児童の育成		4月		2~3月		
推進主体		管理職と研究推進委員・生徒指導担当を中心に学力向上委員会を設置して実施。		成果となる目標		年度末評価		
学力に関する前年度の状況・経年の課題等				学力向上に向けての重点的な目標		年度末評価		
				（指標となる数値等）		（今年度の成果と来年度に向けた課題等）		
						評価		
学 力 の 状 況	全国学 力・学習 状況調 査結果 の状況 (国語、算数、数 学に關 する質 問紙調 査の結果 も含む)	算数 教 学	○文章構成を捉え、内容を理解する設問の正答率が94%であった。キーワードに着目し、語の流れを理解する力が定着している。 ○資料の効果問の正答率が9割であった。Hを伝えるための資料なのかという目的を理解する力が身につけている。 ○「より」という言葉が比較という思考を表すこと指稱する設問の正答率が97%であった。思考力を研究の中心に据えている成果が表れている。	1.授業スタイルの確立 ○「すずかけ学習スタイル」に沿って ・あてての共有 ・一人学び ・交流 ・ふり返り の学びの流れを共通理解	・ふり返りの記述をもとに評価 ※あててに沿った学びを具体的に書く。 ・あてての共有 ※自分の考えの変化を書く。 ※参考になった意見を書く。 ・多様なグループ、ペア・全体交流を授業の取り入れ、実践記録として残す。	・研究の方向性、年間計画、授業作り、ノート指導、ICTの活用方法などの確認(年度初めの研修研修) ・あててや学びの明示及びあててを意識したふり返り ・課題設定の工夫、効果的な言語活動の重視 ・一人学びで自分の考えを持ったうえで交流	◇研究の重点としてICT活用を位置づけることで、タブレットを活用した実践が浸透しつつある。 ○事後研修で授業の進め方だけでなく、ICTの活用方法を共有する場を設定した。「オクリンク・ナックラーズの使い方」オクリンク提出ボックスの活用方法を共有するなど、一定の成果があった。 ○学習国語③「二」文章のよさを記述で説明する問題で、全国平均を20ポイント以上上回った。この結果から以上の力が身に付いていることが確認できる。 ・あててに沿って学びをふり返る力 ・キーワードを使って学びを具体的に記述する力 ◆考えを共有するための「オクリンク・ムーブノート」の効果的な活用方法をさらに工夫改善し、教師間で共有する必要がある。	A
			○文章と図表を関連づける必要な情報を記述する設問では全国平均を13ポイント上回った。条件に沿って文章で説明できる児童が増えつつある。しかし、正答率は5割を下回っているため、複数の情報を関連づけて、条件に沿って自分の考えをまとめる指導は今後継続する必要がある。(経年)	2.思考力・判断力・表現力の育成 ○基本的な学び方の定着 ・ノート指導(タブレット活用も含む)	・ワークシートやノートに自らの考えや友達との考えなどを書き、学習の足あとを残す ・図、表等を用いながら物事、数量の量を捉え説明する。 ・あててに対してふり返りを書き、身につけた学びを意識できるようにする。 ・キーノートを使い、キーワードや効果的な資料をもとに主張を伝える。	・段階に応じたノートの書き方の徹底指導(課題・式・図表・理由、ポイントの記入) ・自らの考え、思考過程、解法の理由・根拠の記入を指導 ・一人学び、図や表・ふり返りの見かけ方のモデル提示 ・あててに対する具体的なふり返り、友だちとの関わりや自分の学びの記入(重点的なチェック) ・タブレット(キーノート)を使った発表(高学年)	◆ICTを活用した実践は広がりつつあるが、「学年ごとに身につけるべきタブレット活用力の系統があいまい」「教師によるICT活用力に差がある」といった課題がある。 年度当初に、 ・その学年で身につけさせるべきタブレット活用の確認 ・そのICT活用方法を担任が身につける場の設定 といった研修の場が学年はしめに必要である。 ◇研究の中心に「思考力育成」を位置づけているので、教師が実践記録やノート事例をまとめるときに思考力を意識している。ねらいがはっきりした授業によって、子どもたちの思考力が高まると考えられる。	
	○三角形の向きが変わっても、底辺と高さが分るかを問う設問の正答率が全国平均を19ポイント上回った。単に公式だけを理解するのではなく、その意味を考える学習の成果が出ている。 ○図形の面積の求め方を問う設問では2割とも全国平均を8ポイント上回った。答えを出す過程を大切にすると学習の成果が表れている。 ○23÷6=3箱あたり5「余ったボールを入れるために4箱必要」と指稱する設問では、正答率が9割。式の意味を考える習慣がついている。 ◆割合で「もとのする量」を1としたときの「くらべる量」に当たる部分を割って説明する設問では正答率が9割程度であった。課題が残る結果である。特に割合のような中でよめ的な概念は、図や表などの具体的な資料を使って説明する学習活動を充実させたい。(経年)	3.考える力の育成	・適切な思考力を使ひこなして、課題を解決したり、考えを深めたりする。 ・学力テストの考えや解き方を記述で説明する問題で、全国平均を5ポイント以上上回る。 例 算数①(3)	・比較によって共通点や相違点を見つけ、意見や考えを作る指導 ・分類することで集めた情報を整理する指導 ・複数の情報を関連づけることで考えを深める指導	◇研究の中心に「思考力育成」を位置づけているので、教師が実践記録やノート事例をまとめるときに思考力を意識している。ねらいがはっきりした授業によって、子どもたちの思考力が高まると考えられる。 ◇学習算数①(3)「文章題の解き方を、言葉と数字を使って記述する問題」で正答率が9割を超え、算数正答率が9割だった。 ・算数の授業方法を説明する活動を取り入れている ・式の意味を考える習慣が身につけている といったことが確認できる。	B		
	○学期末のまとめテストにおいて、国語や算数の基礎学力がおおむね定着していると判断できる児童は9割以上いる。 ◆学力の二極化に対する手立てとして、「ムーブノート」などをタブレットを利用した個別指導を導入しつつあるが、活用方法の工夫・改善が必要である。	3.個別指導の充実 ○朝学習・補充学習を充実と低学力児童の個別指導	・計算や漢字の小テストなどの課題に応じて取り組み、計算力・漢字力を伸ばす ・各教科学習で漢字計算などの基礎的な復習の仕方、復習ノートの作成を個別指導する。 ・アプリを使った朝学習を推進し、個々の学習状況を把握して、追進し実施する。	・朝学習のあて設定。 ・学習相談日や「あてはりタイム」による個別指導 ・個々の課題に応じてプリント学習の反復による漢字計算で9割以上の定着を達成 ・タブレットのアプリを活用し、個々の課題に応じた計算や漢字学習を推進(タブレットによる学習履歴の見取り方の研究・開発) ・九割と基本的な事項の読込・反復・ゲーム化 ・復習項目(ポイントやキーワード)を使ったまとめ	◇タブレットのドリルパークなどを活用して、個に応じた問題を解く実践が増えている。 ○6年生では「学年末のまとめ」で、学習進度に応じたコースを設定し、子どもの実態に応じた復習をした。紙のプリント学習とドリルパークを組み合わせて、個に応じた対応ができた。 ○外国語では英単語の意味やスペルをタブレットで調べる習慣が身についた。 ◆今後は、ドリルパークを使って個々の学習進度を見取る方法を共有して、より効果的に個別学習を進めたい。		B	
○授業が課題に対して自分の考えを持ち、話し合うことを大切にしながら取り組む児童が増えている。話し合い場面が発言したり、考えをノート、ポートフォリオ等にまとめたときの学び方を学年に応じて学んでいく。 ◆わかりやすく話すことのできる児童が多いが、発表について苦手意識を持つ児童もあり、発言する児童が固定化する傾向にある。 ○学習の終了に学びのふり返りをする習慣によって、考えや感想を文章化する力が定着している。(経年)	4. 読書活動の推進 ○学校司書・図書ボランティアや図書委員と連携した推薦図書紹介活動の強化 ○国語科、社会科などの教科学習や総合的な学習などと連携した読書活動の推進	・図書室利用率を高め、本が好きな子の育成を目指す。 ・学校司書を中心に読書通帳の活用、本選びや読書時間の取り方を助言するとともに、図書ボランティアと連携した読み聞かせの機会活用、掲示物の工夫による本紹介を行う。 ・読書通帳の記録を読書の実績として保護者と共有する。 ○図書委員会(児童朝会ビブリアトルーム)本の紹介を行う。 ・各教科における第2図書室利用年間計画を作成する。	・探読ツールの統計機能を使用し、利用者数の記録を取る。 ・学校司書を中心に読書通帳の活用、本選びや読書時間の取り方を助言するとともに、図書ボランティアと連携した読み聞かせの機会活用、掲示物の工夫による本紹介を行う。 ・読書通帳の記録を読書の実績として保護者と共有する。 ○図書委員会(児童朝会ビブリアトルーム)本の紹介を行う。 ・各教科における第2図書室利用年間計画を作成する。	◇今年度も継続して学校司書・図書ボランティア、図書委員会と連携した読書活動の推進を行ってきた。 ◇従来から、「読書交流広場」の掲示板を活用して各学年等の読書活動の様子を交流してきたが、本年度からは、ICTを活用した実践や交流にも取り組むことができた。 ◆読書評価アンケートの読書に関する項目の結果では、読書が好きな子どもは多いが、進んで読書をするという点では二極化している。また、教室における読書にも課題がある。特に高学年では、読書が好きな子どもでも図書室から本が遠い傾向にある。本年度2学期より、電子図書室の構築に導入されたことで、図書室に行かなくても手軽に読書ができる環境が整いつつあるため活用していきたい。また、引き続き第1図書室を読書センター、第2図書室を情報・学習センターとして活用し、図書室を核とした教科横断型カリキュラムづくりをすすめるとともに、国語科「読むこと領域」とつながった指導などで家庭での読書推進も図っていく。	A			
○朝食、就寝、起床時刻など、学力を支える生活習慣に関する項目については、概ね良好な結果であった。 ○あなたの家にとどれくらいの本がありますか」では、25冊以上の回答は20%程度で全国平均を10ポイント下回った。家庭の読書環境が充実していることがわかる。 ○ICT機器活用は「毎日使う」の回答が昨年より16ポイント上昇 ◆平日3時間以上ゲームをしている児童が28%。全国平均並みではあるが、気にしておくべき数字である。「4時間以上」は全国平均を上回る。携帯電話やスマートフォンを使用するとの家庭でのルール作りを啓発していきたい。	5. 研究推進による主体的な学びづくり ○年間を見通した学習計画・指導案づくり ○一人一授業の実施 ○実践事例の交流	・年間計画の作成と一人一授業の公開 ・事前・事後研修会を持ち、成果と課題を明確にし、教職員で共有 ・教職員間で交流した実践記録・授業まとめを研究紀要にまとめ、次年度まで活用	・「課題設定のあり方、相互交流場面の工夫・充実」に視点をいった指導案の作成 ・児童自らが見通しを持ち、課題を深化させ、成果をふり返る授業づくり ・助言指導を入れた学年研修の充実 ・実践記録を通して、お互いの実践の価値や課題を共有(※特にICTを活用して児童の思考力を育てたる実践事例を共有・活用(実践記録交流会))	◇指導案の1ページ目に年間計画を位置づけることで、各教師が年間の見通しをもつて指導することの大切さを理解できた。 ◇研究発表会や外部講師から「ICT活用」「思考力育成」の成果を認めていただいたことで、研究の質が向上を確認できた。 ○「ICT活用」「思考力育成」というキーワードに沿った原稿を集めて紀要を作った。その過程で、本校の研究の方向性を確認できた。 ◆「ノート・タブレット部会」「個別・朝学習部会」を通してICT教育をさらに推進するための体制を整えたい。 ◆全ての教師が「オクリンク」の提出ボックスを利用して、考えを交流する。「スクールワーク」で送受信する」といった技能を身につける必要がある。その技能を土台として、「ICT活用の実践事例」をさらに集めたい。		A		
○4月の研修研修により、研究の方向性や見通しを教師間で共有している。「思考力の育成」「ICT活用」などのキーワードに沿って授業研究を進める。 ○「可視化・操作化・構造化」を手立てとして思考力を育成する単元づくり、学習づくりを推進する。 ○「ノート・タブレット」「個別・朝学習」「環境掲示・読書推進」のチーム会に分かれ、全ての教師が研究に関わる体制を組織する。本年度は、全てのチーム会が「ICT活用」をテーマにして活動を進める。 ○公開授業については「授業まとめ」によって、その実践の価値を記録し、教職員全体に広げたい。 ○「実践記録」「ノート事例」を研修研修で交流することで実践の価値を共有する。 ◆「授業まとめ」「実践記録」「ノート事例」を研究紀要にまとめる。	6. 学校園との連携	・コロナ禍の中でも、できる形を工夫しながら学校園所連携に継続して取り組む。 ・学校評価アンケート(職員)「学校園所連携」の項目で、9割以上の肯定評価をのめす。	・「個に応じた支援」「環境・読書」「ノート、ポートフォリオ」に分かれた研究推進チーム会の実施及び成果の共有 ・「児童理解を図るため、ウディッ・カルチャー・タウン青少年健全育成連絡協議会を定期的に開催 ・年間を通して継続的な学校園所交流の計画的な実施 ・学校・園だよりの交流 ・「けや台中学校(園舎含む)で統一したあいさつ運動の横断帯を作成することにより、あいさつ活性化につなげる。 ◆三田西陵高校生徒の「子ども未来型型小学校実習」については、コロナ禍で実習できなかったが、カリキュラム編成等もあり、今後は形をたえて再実施できるように予定。 ◆学校園所連携では、授業見学もでき、全体会・分科会での意見交換も今年3回実施し、各園所の課題等を共有することになった。 ◆今年度は「児童理解を図るため、ウディッ・カルチャー・タウン青少年健全育成連絡協議会を定期的に開催」をテーマに、年間を通して継続的な学校園所交流の計画的な実施 ・学校・園だよりの交流 ・「けや台中学校(園舎含む)で統一したあいさつ運動の横断帯を作成することにより、あいさつ活性化につなげる。 ◆三田西陵高校生徒の「子ども未来型型小学校実習」については、コロナ禍で実習できなかったが、カリキュラム編成等もあり、今後は形をたえて再実施できるように予定。 ◆学校園所連携では、授業見学もでき、全体会・分科会での意見交換も今年3回実施し、各園所の課題等を共有することになった。	B				
○家庭では宿題をしているが、読書、自主学習を行う児童の割合が少ない。(経年) ○地域とのつながりを感じている児童が多い。 ○地域の行事に参加しているかについては、全国平均やや上回っているが、R11に比べ、低下していることで、コロナが原因かどうか経過を見ていなければならない。 ○オープンスクールの参観、中・小合同クイズ大会、生徒指導連絡会、学校園所連携会議などを行っている。教科学習の円滑な接続を目指している。	7. 家庭や地域との連携	・2年2回の児童・保護者アンケートから、その結果を分析し、成果と課題を家庭と共有する。また、どの項目もできていないが、90%以上になるよう取り組む。 ・地域支援ボランティアとの連携を計画的に実施する。 ・学習質問紙「地域」の行事に参加しているか項目で、肯定意見が昨年度の65%以上をのめす。 ・学習質問紙「日」どのくらい携帯電話やスマホ、SNSや動画視聴するか」の項目で、3時間以上を25%以下にする。	・保護者にスマホ・ネット・SNS・ゲーム機などの使用時間を問い、家庭でのルールづくり等を啓発 ・アンケート結果より、把握した成果と課題等を、学校だよりや学年通信等を通して公表・共有 ・「コミュニティスクールの推進を図るために、年間を通して学校地域運営協議会を計画的に開催 ・地域・地域コーディネーターと校内地域連携担当を中心に、学校支援ボランティアと連携した授業の工夫、推進 ・学校支援ボランティア推進計画、年間予定表を参考にして派遣依頼書を作成し、活動の実績記録を残す。		◇「携帯・スマホやPCに関する項目で、3時間以上使用している児童が10%と、使用の仕方は概ね良好である。本年度も引き続き3年～6年生と保護者対象のネットモラル講習会を開催し啓発していきたい。 ◆学校地域連携協議会の開催や学校支援ボランティアとの連携の中で計画に企画運営することで、6月には、3年ぶりに地域との連携による防災体験授業と引き渡し訓練を実施することができた。また、授業の補助として今年も図書ボランティアやミニボランティア、今年もHの授業でカラーナフの使い方の補助ボランティアの方々にお世話になり、児童との交流もでき、学校生活全体において地域の方々とのコミュニケーションも取れるようになってきている。 ◆コロナ禍で滞っていた行事やイベントも少しずつ実施するようになった。しかし、「地域の行事」に参加しているかの項目で、60％にまで下がり、全国と比較すると、3P+であるが、本校としては年々低下している。今後地域行事に参加する意義を家庭と連携し伝えていきたい。 ◆家庭・保護者との連携については、PTA活動を中心に学年活動や学校行事に積極的に参加を呼びかけ、多くの保護者に学校に足を運んでいただき、日ごろの児童の活動や頑張りを載せていただいた。また、学校アンケートの協力のもと家庭学習の現状や地域との交流について理解することができた。	B		